

ピアノ アドバイザー



赤松 林太郎

大分市出身。兵庫県立兵庫高等学校を経て、神戸大学を卒業後、パリ・エコール・ノルマル音楽院にてピアノ・室内楽共に高等演奏家課程ディプロムを審査員満場一致で取得(室内楽は全審査員満点による)。ピアノを元吉明子、熊谷玲子、ミハイル・ヴォスクレセンスキー、フランス・クリダ、ジャン・ミコー、ジョルジュ・ナードル、ゾルターン・コチシュ、室内楽をニーナ・パタルチェツ、クリスチャン・イヴァルディの各氏に師事。

世界的音楽評論家ヨアヒム・カイザーにドイツ国営第2テレビにて「聡明かつ才能がある」と評された2000年のクララ・シューマン国際ピアノコンクール受賞がきっかけとなり、本格的にピアニストとして活動を始める。国際コンクールでの受賞は10以上に及ぶ。

国内各地の主要ホールはもとより、アメリカ、ロシア、ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、台湾、コロンビアを公演で回る一方で、2016年よりハンガリーのダヌビア・タレンツ国際音楽コンクールの審査員長を歴任しており、近年はヨーロッパ各地で国際コンクールやマスタークラスにも多数招聘されている。これまでに新田ユリ、手塚幸紀、堤俊作、西本智実、山下一史、マルク・アンドレーエ、デアーク・アンドラーシュ、ミロスワフ・ブヴァシュチック、タラス・デムチシンの指揮のもと、東京交響楽団やロイヤルメトロポリタンオーケストラ、ロイヤルチェンバーオーケストラ、デュッセルドルフ交響楽団、ドナウ交響楽団、シレジア・フィルハーモニー管弦楽団などと共演。キングインターナショナルから6枚のCDをリリース。新聞や雑誌への執筆も多く、著書に『赤松林太郎 虹のように』(道和書院)、『3年後、確実にクラシック・ピアノが弾ける練習法 ショパン編』『同ベートーヴェン編』(リットーミュージック)、『徹底解説 バッハ〈インヴェンション&シンフォニア〉弾き方教え方』(音楽之友社)、『プレ・ソナチネ』(東音企画)がある。

現職は、洗足学園音楽大学客員教授、大阪音楽大学特任准教授、宇都宮短期大学客員教授、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会評議員、カシオ計算機株式会社アンバサダー。

檜舞台に立つ

檜(ヒノキ)のステージは格式の高いものです。何枚もの板がはめ込まれてきた大舞台は、演奏家の人生のピースが1枚ずつ組み込まれているようでもあり、魂を捧げて音楽を奏でてきた演奏家たちの歴史がたしかに刻印されています。そして舞台裏の壁や柱に書き残された彼らのサインやメッセージを見るたびに、世界中どの劇場でも、私たちは音楽でつながっているという連帯を覚え、作曲家に恥じない務めを胸に誓います。

檜舞台へと続く階段は、はてしなく長く、暗い道のりです。私にとってのヨーロッパ初舞台はデュッセルドルフのトーンハレでしたが、第3回クララ・シューマン国際ピアノコンクールの最終ラウンドでは、この長い階段がブラックホールにつながっているように感じられ、1歩ずつが不安でなりませんでした。その日はドイツ国営第2テレビ(ZDF)のカメラが私をずっと追っていましたが、舞台裏からステージに出る瞬間、すべてが真っ暗になる場所で、指揮者のマルク・アンドレーエは「トイ トイ トイ！」と勇気づけの魔法を口にして、私の背中をポンと押しました。

世阿弥は《風姿花伝》の中で、人間の成長を「時分の花」と「まことの花」という言葉で例えています。若い演奏家は生命力にあふれる、鮮やかで魅力的な花です。大学生や大学を卒業したばかりの若者は、まさに「時分の花」であり、誰もがそのお花畑の住人です。陽射しがよく、清々しい風が通るお花畑にいれば、居心地がよいに決まっています。しかし、そこでの輝きはわずかな時間。ひとたび登山口から上ると、苦しい坂があるばかりなのは、檜舞台へのプロセスとまったく同じです。「時分の花」としての魅力に、不断の努力と結果と運の3つが備わった時、檜舞台への扉が開かれます。

ステージの中央で大劇場のスペクタクルを見渡し、観客から万雷の拍手をいただく瞬間、演奏家として歩んできた人生すべてが肯定されます。ステージの大きさは人それぞれで異なるでしょうが、音楽を志す人であれば、一度は、檜舞台に立つことを夢見てください。ステージに立った数だけ、花の神秘に触れることができ、芸をとおして人間の本質に近づいていくことができる。枯れてなお咲く「まことの花」。私もまだ道半ば…。

ステージは伝統を継承する場

2005年4月、私はザールブリュッケンでジャン・ミコー先生のリサイタルを聴きました。留学先のパリで影響を受けた師のひとりで、82歳という年齢はあらゆる意味で限界を物語っていました。私が聴ける最後の公演になるかもしれないと思い、国境を越えてドイツまで聴きに行ったわけですが、師はいまだに健康で、コンサートや指導にあたっている様子がSNSに投稿されているので、まこと巨匠というほかにありません。

このステージで奏でられたショパンの葬送ソナタは決して忘れることのできないものでした。第一音からすべてを超越した、魂の慟哭そのもので、「ジャンよ、生きろ！」と師の背中を支えるアルフレッド・コルトーやヴァルター・ギーゼキングといった大演奏家の幻影を見たのは、私だけではなかったでしょう。師の実生活の中にあつた大ピアニストがステージに現れたように感じられた瞬間、歴史はひとりでに紐解けたのです。

ショパンのために生きた者の軌跡は、何よりも雄弁に、ショパンの生き様を等身大で語るものでした。最も伝えられるべきものは「心」であり、魂に関わる根源的な部分。形式でなければ、ましてや形式的なものでもありません。伝統は誰かによって作られた既成のフォームではなく、行為者の営みの集積にほかならず、再現芸術家にとっての伝統とは、結局のところ、各々の生き様なのです。

師に教わるということは、たわわに実った木から果実を一つずつ摘み取ってもらうことです。若いうちは、先生から手渡される果実が、青くて苦いと感じられるかもしれませんが、もらってすぐに美味しいと思えるものは少ないでしょう。そこに先人の教えが含まれており、熟するにはどうしても時間が必要なのです。どれほど辛くても、与えられた果実は決して手放してはいけません。最初は師のやり方を模倣するだけで十分です。それを繰り返して、消化するうちに、自分の身の丈に合った形となって再構築されていきます。若くて無我夢中の頃は、そのありがたさが分からないものですが、その実がわが栄養となり、やがて木となった時は、それを次の世代に渡さなければなりません。演奏を聴くことは先人の教えを受け継ぐ伝統の継承であり、ステージに立つことはその行為そのものなのです。

ステージに立ち続けるために

パリでフランス・クリダ先生の門下にいる間、精神的には極限状態でした。フランス・クリダという「伝説」に触れている、サイケダリックな高揚感だけで4年間を過ごしました。しかし、いつまでも「信者」でいてはいけない。師のもとで学びたいことや習いたい曲は尽きませんでした。このまま師弟関係を続けても、一人で人生を歩んでいくことはできない。「このまま私のところにいても、あなたはフランス・クリダのコピーになってしまうわね。ここにいたら、リントロウは本当のアーティストになれない。さあ、行きなさい！」と別れを切り出したのは、クリダ先生の方からでした。先生は私をハグして、旅立ちの祝福をしました。別れの瞬間は実にあっけないものでした。2005年、私はパリを離れてブダペストに移住しました。クリダ先生はその7年後に、還らぬ人となりました。この地上で会うことは二度と叶いませんが、クリダ先生らしい、愛の深いやり方だったと思っています。2007年6月、完全帰国。

ヨーロッパでの日々、そして日本に帰ってからの様々な経験は、私の心を根底から揺さぶり、多くの傷を負わせました。失敗をするたびにひどく落ち込みましたが、失敗をしないのが一番の失敗だとも思っています。多くの失敗があったからこそ、最初に檜舞台に立った時とは比べものにならないくらい複雑な陰影や細かな襞を、作品の中に見ることができるようになり、人にも寛容に接することができるようになりました。

ステージには魔物が棲んでいます。ステージに立ってきた人であれば、この魔物の存在に気づいているはずですが、ステージに立つ以上、避けて通れないもの。それゆえ、プロフェッショナルとして生きていくためには、タフネスな心と身体が必要になります。それを磨き上げる不断の努力を欠かさない生活リズムと思考パターンを形成することによって、自分が思っている以上の仕事がこなせるようになります。

最後に…。表現者を目指す人にとって、若い時の乱読や乱聴は、かけがえのない経験になります。ムダと思われるものから逃げない方がよいのは、どれだけのムダを経験したかで、その後の人生の豊かさが決まるといっても過言ではないからです。ステージに立った時、音楽は人なり！